

[文献紹介]

上野浩道・田嶋一 編

『大田堯の生涯と教育の探求
「生きることは学ぶこと」の思想』

(東京大学出版会 2022年8月刊)



植田健男 (花園大学社会福祉学教授・名古屋大学名誉教授)

古くからの中小企業家同友会の会員で、大田堯の名を耳にしたことがないという人はいないのではないだろうか。同書の帯には「いま出会い直す、創造的な『共育』を探求し続けた人生」と書かれており、これまで同友会でごく普通に用いられて来た「共育」という言葉が大田と切り離しては考えられない以上、興味をひかれるところであろう。実は、教育研究者である私自身、同友会に関わるようになって、最初に違和感を抱いたのがこの「共育」という言葉であっただけに、興味深々で読ませて頂いた。

本書は、大田と縁のあった八名の人たちによって執筆されており、第Ⅰ部は大田の評伝として、そして、第Ⅱ部は大田の主な研究活動、教育活動についてテーマ別に論じられている。生涯にわたり「教育を通しての人間研究」を標榜した大田であればこそ、その思想が大田自身の生き方と密接不離のものとして形成されて来たことは容易に予想され、第Ⅰ部の評伝があっではじめて私たちは、その根源がどうやって生み出されて来たのかを知ることができる。また、大田の実に多様な活動が、戦後の日本の歴史において教育研究活動に果たした役割や、大田自身の研究にとって持った意味が、第Ⅱ部で解説されることによって、その思想を体系的に俯瞰することが可能となる。第Ⅰ部のボリュームがもう少しあっても良かったのではないかとの想いは残るが、その構成と内容には感心させられ

る。

大田は1918年に生まれ、2018年に百歳で亡くなっており、まさに戦前、戦中、戦後の各時代を生き抜いた。その間、日本の社会そのものも、また、特に教育については極めて大きな断絶(部分的には連続しつつも)があり、大田はそれを身をもって経験したのである。それは「戦争を知らない子どもたち」である私にとっては、想像もつかないことである。戦前、戦中の天皇制国家による教育、そして戦後の民主教育とその転換については文献でしか学んでいないので、自分がリアリティを持って理解しているとは、とても言えないことを考えると、大田の人生を通して少しでもその片鱗を伺い知ることができれば、との期待が高まった。

本書の構成は、次の通りである。

- 第Ⅰ部 大田堯の生涯—「教育とは何か」を問い続けて (田嶋一)
- 第Ⅱ部 大田堯の仕事—「人間の教育」を求めて
 - 第1章 本郷プラン後の地域教育計画—若き日の学問の模索 (小国喜弘)
 - 第2章 「話し合う」と「関わり合う」教育研究に向けて—生活綴方との出会い (狩野浩二)
 - 第3章 「民間教育」と「子育ての習俗」への視座—「ひとなる」という教

- 育思想のなりたち (田嶋一)
- 第4章 戦後民主主義と「教育」—学習権から基本的人権・生存権を編みなおす (香川七海)
- 第5章 「ちがう」「かかわる」「かかる」に込められた教育思想—教育学を生命の科学につなぐ (久保健太)
- 第6章 学習環境としての「社会的文化的胎盤」—「自然との共存をめざす教育」への道程 (安藤聡彦)
- 第7章 「教育はアート」の根底にあるもの—教育を通じた人間のlifeの研究 (上野浩道)
- 年譜 (相馬直美)

「第I部 大田堯の生涯—『教育とは何か』を問い続けて」は、一つの章のみで構成されているが、とてもコンパクトに、しかも、手際よく前述したこの部の目的を達成している。1918年3月22日、広島県豊田郡船木村の小地主の家柄に生まれ育った築島堯(旧姓)は、家庭の事情で大阪天王寺に移り住むことになり、旧制大阪府立八尾中学校、そして旧制広島高等学校文科に進学し、ベスタロッチの教育理念に惹かれて1939年東京帝国大学文学部教育学科に入学した。

既に1937年には日中戦争が始まっていたが、戦火の拡大とともに大学の卒業も三ヶ月繰り上げられ、やがて徴兵されて一兵卒としてセレベス島(インドネシア中部のスラウェシ島)のジャングルで敵の上陸を迎え撃つ守備隊の任にあたることになった。しかし、1946年5月に無事、復員して、仕事を探すつもりで家族が疎開していた郷土の船木村に戻った。同年9月に本郷町に住む大田智子と結婚して大田に改姓したが、研究室の恩師の勧めで東京大学大学院特別研究生となり、夫婦で上京して研究生活に入った。やがて1949年、新制東京大学の創設に伴い新設された教育学部の助教授となった大田は、旺盛な熱意をもって教育研究活動に邁進していった。

戦前の中央集権的・軍国主義的な教育への反省から、戦後初期には平和と民主主義を目指し学校と地域社会とをつなげるべく「本郷プラン」と呼ばれる本郷地域教育計画の策定に着手し、それに続いて新しい教育運動が一挙に押し寄せて来るなか、生活綴方(せいかつつづりかた)・子どもたちが日常の生活について作文を書き、それを素材として生活上の問題や生き方について考えていく教育実践)と出会い、行き詰まっていた大田の教育研究に大きな転換がもたらされた。民衆社会の子育て文化の掘り起こしに向かい、「種の持続」という視点から養育と教育の営みをとらえ、「ひとなる」という民間に伝えられてきた養育の語彙にたどり着き、それがキーワードとして大田の教育研究の中心に据えられていった。一方で、東西冷戦の激化と国内政治の反動化のもとで政治的混乱は拡大し、教育もその混乱にいつそう深く巻き込まれつつある状況となった。

「第II部 大田堯の仕事—『人間の教育』を求めて」では、大田の実に多様な活動が、戦後の日本の歴史において教育研究活動に果たした役割や、大田自身の研究にとって持った意味が、テーマ別に解説される。まず、「第1章 本郷プラン後の地域教育計画」では、1940年代後半から50年代初頭にかけての、広島県本郷町の地域教育計画(通称「本郷プラン」)への関わりについて書かれている。

1947年に文部省が戦後初めて出した「学習指導要領一般編(試案)」は、地域での自主的な教育内容(教科課程)の編成を重視する立場を示し、全国各地で教育内容を構想する動きが現れた。「多くの教師が学校から地域に出て教育学者や地域住民と協力して調査活動にとりくむことにより、地域社会を知り、視野をひろげ、また調査の結果をもとに同僚と討議をくりかえして教育計画をたてる」(大田編『戦後日本教育史』)ことになったのである。戦前、学生時代からアメリカの教育学者であるデューイのコミュニティ・スクールの思想と実践に関心を

持っていた大田は、本郷小学校を実験校として地域に本郷町教育懇談会を結成し、広く町民を組織して教育計画を創出して、日本社会に地域社会学校をつくり出そうと試みたのである。

しかし、本郷プランは1949年をヤマとして次第に衰退し、「出直し」を余儀なくされることになるが、1950年代においても大田が他地域における複数の教育計画に参加し、手探りで自身の学問を模索していたことが明らかにされている。大田は、海後宗臣の川口プランに疑問を呈し、地域教育計画の「方法」を変更しようと考え始めていた。

当時の多くの近代主義者がそうであったように、大田は教育計画に基づく社会変革の可能性を探ろうとしていたが、教育のまわりをぐるぐるまわる社会調査を繰り返しているだけで、一人ひとりの子どもたちを主人公として登場させられない、という致命的な欠陥を持っていたことや、また、「それは一つの理想と信ずる教育計画を、地域と学校の上に、いきなりおおいかぶせるという結果になってしまった」との総括に至り、やがて教師主体で教育計画を立て、子どもに対する一種の「インドクトリネーション」に可能性を見出すようになっていったかに見える。

「第2章 『話し合う』と『関わり合う』教育研究に向けて」では、大田が生涯を通して追究した実践的教育研究を形づくる契機となった生活綴方と文集『ロハ台』との接点について述べられている。人びととの対話や交流を通して子育てや人間形成の原理・原則に接近していくという大田の研究スタイルは、欧米の文献頼みの「翻訳教育学」や、観念的な「講壇教育学」と呼ばれる従来の教育研究へのはがゆさとそれへの訣別、これからの時代を作る教育研究への模索がその底流にあったと思われる。付言するなら、前述の「方法の変更」も、実は、生活綴方の実践との出会いによっていることを示している。

「第3章 『民間教育』と『子育ての習俗』へ

の視座」では、イギリスでの在外研究を経て帰国した大田が、日本社会における「民間」の意味をとらえ返し、「民間教育」の内容を明らかにするという方向に教育研究を展開させていく姿が描かれている。それまでの教育学が見過ぎてきた「民間」の領域を研究対象として見出したことは、わが国の教育学にとって大きな意味を持つ出来事であった。

イギリスで地域社会や人々の生活と文化に即して、「教育とパブリック」の問題を考えてきた大田は、日本社会の教育を基底から支えてきた「民間」「民間教育」の歴史の中に、教育の営みを民衆の側から捉え直す鍵があると考えたのである。

その文化が文字に記録されてこなかったためにこれまで見落とされてきた子育ての習俗の研究がスタートし、岐阜県恵那郡の山村で「ひとなる」をはじめとする一連の古語と出会うことになった。大田は、「教育とは何か」を問い続けていく中で、「教育というものを何よりも人間という動物の育児行動、種の持続のためのいとなみとしてとらえ直すところから出発するほかあるまい」という境地に到達したのであった。

大田の教育思想の成り立ちがここからも見てとれる。

「第4章 戦後民主主義と『教育』」では、大田による「学習権」の理解について考察している。戦後三大教育裁判と呼ばれているものの一つである家永教科書裁判の中で、大きな論点の一つとなった教育権の所在が国にあるのか、国民にあるのかという論争のなかで、やがて学習権という概念が提起されるようになり、その後、理論的な発展を遂げて来た。

他の論者との比較において、学習権から基本的人権・生存権を編みなおすという大田のアプローチのユニークさが示されている。

「第5章 『ちがう』『かかわる』『かかる』に込められた教育思想」では、人間と他の生命とはどこが重なり、何が違うのか、そこから学びというものを描き直すことはできないのか、と

いう視点から学びとは何なのかを問い続けた大田の思索について述べている。

大田は、「自己更新」「自己創出」「不安定」「選択」「根源的内発性（自発性）」といった言葉を架け橋として、大局的な視野から生命、人間、学びを語り、教育学を生命の科学につなごうとした。本章は、大田が生命、人間、学びをどのように考えていたのか、その基本的な考え方をスケッチしている。

大田は、70年余りにわたる教育探究の到達点を、『大田堯自撰集成』第四巻（2014年）の巻頭の「生命から教育を考える—集成全巻のキーワード」で、生活綴方、根源的自発性、学習権、社会的文化的胎盤、教育はアートという五つの言葉を掲げて解説している。「第6章 学習環境としての『社会的文化的胎盤』」は、このキーワードの中ではやや異質な「社会的文化的胎盤」という耳慣れない言葉を取り上げて、「学習環境」という枠組で整理しており、大田の「自然との共存をめざす教育」への道程を示している。

先の『大田堯自撰集成』第一巻のタイトルが「生きることは学ぶこと 教育はアート」とされているように、「アート」には生命と結びついた意味が込められている。「第7章 『教育はアート』の根底にあるもの」は、大田の教育思想の中心に流れている考え方について述べ、教育を通じた人間の life の研究を解説している。

本書は、決して「共育」という言葉の成り立ちについて詳細に語られているわけではないが、一読した時、大田がしばしば語っていた「教育」という言葉への物足りなさ（education の翻訳としては、この言葉は適切ではないとする）と、ある種の反発があってこそ生まれて来たことが推察されるし、その内容や理由についても数々のヒントが含まれている。機会があれば、この点については改めて他稿を期することとしたい。

